

臺山廣瀬清風小伝

学芸課主任 三好基之

廣瀬臺山は、延享4（1751）年1月28日、津山藩士廣瀬義平の長男として出生した。

父の義平は、はじめ右門太と称し、雲齋廣瀬清右衛門の養子となる。義平の出自については、津山藩士の勤書である、『古参御取立』（愛山文庫・津山郷土館蔵）の「廣瀬周蔵」（周蔵とは臺山の名）の項に、「亡父赤水（義平の号）実家森対馬守家中香山内蔵太云々」の記事があるところから、播州三ヶ月藩森氏の家中の出身といえるだろう。三ヶ月藩は、慶長の初め作州一国を領した森藩の支流である。津山藩が、元禄10（1697）年国除になった後、その支流が三ヶ月藩となったものである。家中には津山に因縁浅からぬ関係の者も少なからずいたはずである。藩の記録によれば、廣瀬義平はこのようになっているが、実は、東北條郡大篠村の大庄屋安黒家の出身である。文化12（1815）年、津山藩士正木輝雄によって編まれ、のち儒官昌谷精溪によって輯された『東作誌』の東北條郡高倉庄大篠村の項に「臺山の考赤水翁……大篠村の里長安黒家より出て廣瀬氏の嗣となる、因て清風臺山の名あり」と見える。文化12年は、臺山死後2年目に当り、したがってこの記載は極めて信憑性が高い。また臺山の著『涇渭辨』が、その死後文久2（1862）年、彼の外姪上原看雲らによって上刻された時、その著の後記に「族孫安黒良信」の記述が見える。これらによって、臺山の父の義平は大篠村安黒家の出身であることには疑いない。思うに大庄屋といえども身分は農に当り、そのため香山家の養子として士分になり、廣瀬家へ入贅したのであろう。なお香山と安黒との両家の関係も親密であったと思われる。後に臺山が養子を迎えるに当って、香山内蔵太の弟政之丞を決めたのも、このことを裏付ける。廣瀬家の遠祖は、『東作誌』によれば「赤松信濃守範資の四男廣瀬近江守朝則」とある。近世に至って、臺山の岳父清右衛門は、元禄6（1693）年、松平三河守の御前坊主を仰

せ付けられている。松平氏津山入封以前からの「古参」である。

臺山の母は隅田氏。勤書の元文4（1739）年2月8日の項に「母義隅田族娘養女貫置追而右門太江娶申度旨」を願い出たとある。隅田氏については不詳。

「隅田族」……という表現から、廣瀬家と比較して、格式の一段低い家の出であろう。津山藩士馬場貞観が慶応2（1866）年に著した『老人伝聞録』（『津山温知会誌』所収）によれば、「其妻は飯岡番所の女にて嘉左衛門等の妹也」とある。飯岡番所とは、吉井川の中流にして、備前と美作の国境、津山城下より5里余の場所。番人は給米20俵2人扶持。御藏奉行50石取の廣瀬家とは比較にならぬ。

廣瀬臺山、姓は源、諱は清風、字は穆甫、通称は初め周蔵、のち寛政3（1791）年父の死後、雲太夫と改名する。



片桐蘭石筆

臺山肖像 文化8年（1811）

片桐蘭石
臺山肖像

祖父の名である雲齋・雲平に因んだものか。臺山はその号。臺山の読みは、郷里の巷間では「タイザン」と清音を専にす。大篠村の臺山に因んだものである。その書画齋を白雲窩と称す。

このころの父義平は、藩中での格式は大番組、寛保2(1742)年8月、大坂御蔵目付である。臺山が生れたのも津山藩大坂屋敷であったといつてよからう。宝暦元年1月末に臺山を生んだ母隅田氏は、同年5月5日に病死した。わずかるカ月余で母と死別した臺山は、その面影すら記憶していなかったであろう。臺山の一生を通じて肉親への薄縁という運命は、奇しくもここに始まるといつてよい。母の庇護を失った臺山は、幼年、虚弱な体質であった。父の義平は、長男の臺山がひ弱であったため、成長も覚つかないと考えたのであろう、後に娘に養子を取って家督の相続を考えたようである。廣瀬右門太の勤書、宝暦8(1758)年12月18日の項に、「岡部対馬守殿組与力関根五郎兵衛第蒲生藤蔵与申者、廿七歳罷成、此者養子仕、末々娘与娶申度旨願之通被仰付候」とある。臺山8歳の時である。しかし藤蔵は翌年出奔し、行えられなくなった。

父の義平は、妻の死後、後妻を娶ったようである。宝暦12(1762)年の勤書に男子出生とあることから明らかである。ただし、この男子の其の後の動向は不明である。間もなく死去したのであろうか。義平には、他に一人の息子がいた。母は小山氏といわれている。勤書の明和元(1764)年9月18日の項に、「妾服(腹)之男子、先年外ニ而出生仕罷在、当申九歳罷成候、今般引取申度旨、伺之通被仰付候」とある。生れたのは宝暦6(1756)年、臺山より5歳年下である。名は彦蔵、後、藩の勘定奉行・町奉行・郡代兼帯の上原彦市の養子となり、臺山の唯一の肉親として、晩年の臺山が身を寄すことになる。

臺山が廣瀬義平の嫡子となったのは明和2(1765)年、15歳の時である。義平の勤書によれば、「十月廿八日、数年実艱相動候付、再養子被仰付候」、「同日、実子先達而虚弱ニ候処、当時丈夫盛長致候付、右之悴、嫡子へ相願候事、勝手次第之旨被仰付候」とある。再養子とは、以前に蒲生藤蔵を養子にしたことを含めているのである。とうてい生き永らえる見込みはないと思われた臺山も、この頃には世間並の青年に成長したのである。世の秀才によくある例であった。

臺山が嫡子になった明和2年前後の、父義平の動向をみ

ることにする。

宝暦9(1759)年、大坂より帰津し、7月、御蔵奉行。同11年10月、御金奉行。同12年5月大坂諸御用向仮役、明和元年1月高50石下される。同2年、大坂御蔵奉行・御金方御目付・御留守居・東西飛脚兼帯。5月、御買物・御普請方兼帯。同3年3月、家族ども大坂へ引越す。臺山の太坂暮らしが始まった。

臺山が義平の嫡子として、立派に成長を遂げた明和4年9月、次男の彦蔵を上原彦市の養子に遣した。義平の勤書に「二男彦蔵義当亥十二歳罷成候、然ル処、上原彦市養子致度旨相届候」とある。2年後の明和6年5月、岳父彦市は病死し、彦蔵は14歳で上原家の家督を相続した。格式は中奥組。一方、義平は、大坂御蔵奉行本役・御金方御目付・御留守居兼帯。臺山も父に従って御用向を勤め、年末に金5両を下されている。明和9(1772)年4月、臺山は、安部撰津守寄騎拓植仁蔵妹と婚約した。臺山はこの妻と一生を偕にする。

臺山と父義平との大坂勤めは安永4(1775)年中中期まで続く。6月になって、義平は、老年を理由に御役御免を願い出た。勤書によれば、「及老年候付、御役御免津山江被差返候様相願、并悴周蔵(臺山)茂見習御免、部屋住ニ被差戻候様、口上書差出、両様共願之通被仰付候」、「大坂勘定等相済候ハ、勝手次第表江引越候様、被仰付候」とある。義平は臺山をはじめ家族を引き連れて、7月9日津山へ帰った。

臺山は大坂を離れるに際して、福原五岳から「画石三面法図」を贈られた。それには「安永四年乙未夏五、広瀬瀨賢兄需、福元素」と為書がある。福原五岳、名玄素、後元素と改める。通称大助、字子絢、別号を玉峯と称す。出身は備後。画法は池大雅に学び、山水人物を巧みとする。この時五岳は46歳。臺山の画の師は五岳であるが、その出合は、父義平の二度目の大坂勤めの期間に当る明和3年から安永4年の9年間であろう。臺山16歳から25歳に当る。其の後、安永9(1780)年秋から翌年の春にかけての1年間足らずの京都御留守居役時代にも、接触があったかも知れない。青年時代における五岳との出合が、臺山の終生の師としての五岳の影響を決定付けたと思われる。それは単に画法の問題ではなく、文人として生きてゆく場合、画がどのような意味をもつのかという根本の問題においてであつただらう。五岳の「画石三面法図」は、若き臺山にとって、

禪の法嗣が仰ぐ師の頂相のような意味にうけとめられたと思われる。臺山はこの頃、同じく浪華の細合半齋に詩文ならびに書を学んだといわれている。細合半齋、名方明、別に斗南と号す。大坂に「学半書塾」を開き、詩社「混沌社」に属す。享和2（1805）年没。

安永8（1779）年2月、父義平隠居し、臺山が家督を相続した。格式大番組。義平は惣髮して赤水と改名した。翌9年8月、臺山は京都御留守居見習役を命ぜられ、9月に家族を召し連れて出立した。さらに翌天明元（1781）年3月、江戸への引越を命ぜられ、着府と同時に江戸定府を命ぜられた。役職は御小姓御近習、つづいて御留守居定助を兼ねた。臺山31歳。異母弟の上原彦蔵も在府していた。この年から、文化8（1811）年61歳まで、臺山の江戸での生活が始まる。やがて御留守居見習、御次役、御小納戸添番助などを務める。寛政2（1790）6月、父赤水（義平）病死す。翌年、臺山は周蔵を改め雲太夫と改名した。

寛政3年9月、臺山は、この歳まで男子に恵まれなかったため養子を思いついた。勤書の同年月の項に、先に述べた父赤水の実家、森対馬守家中の香山内蔵太の弟政之丞を養子とし、娘と娶せることを願い出て許可されている。しかし翌々年、政之丞は離縁され、娘は一カ月余後に病死した。政之丞の離縁は娘の病気が極まったためであろう。寛政6年、御留守居定助を命ぜられるとともに、この頃から藩主をはじめその子弟の御手跡指南を仰せ付けられている。君側の重臣としての職責がようやく重荷になりはじめた。江戸の文人との交流が魅力あるものになってきたのである。同年6月2日、勤書に「難澁申立候付、御留守居定助、以御用捨御免被成、三ヶ年之間並之通被仰付候」とある。

この頃から年次の款識をもつ作品が、管見に入る。「乙卯臘月写干白雲窩中臺山」の款をもつ「江村烟雨図」は、現在津山で見ることができるものの一つである。「白雲窩」とよばれる齋名も「臺山」の号も、もうこの頃使用されていた。寛政8年、臺山は再び御留守居定助に任命された。また画業も増え、加えて、寛政9年、香山内蔵太の次男与五郎を再養子し、自分の前名周蔵を襲名させている。この年、『文武涇渭辨』『雅俗涇渭辨』をものにした。充実した年であったといえよう。しかし翌10年には、病気を理由に役儀御免・御留守居定助御免を願い出て許されている。御手跡御相手は元のままである。忝周蔵の出仕も順調



廣瀬臺山筆 山静日長図 文化8（1811）

に進んでおり、表立った役職からは退きたいというのが、偽らざる心境であった。文人たちとの交流も次第に深まってゆく。今日、津山の某家に伝わる「庚申」（寛政12年）の年記をもつ「琴囊」が、臺山の物であるとするならば、その交遊は、僧雲室・片桐蘭石・谷文晁・大窪詩佛・浦上

玉堂などに及ぶ。臺山50歳の時である。

享和3（1803）年5月、53歳になった臺山は隠居した。勤書に「去年以来数々中風相煩、其上及老衰、御奉公難相勤旨、願之通隠居被仰付候、数十年無滞相勤太儀思召候段被仰渡候」とある。また悴周蔵の勤書には、「父雲大夫、臺山与改号」とある。悴周蔵には、前年5月、小沢四郎の嫡女を嫁に貰った。まずは一区切といったところであっただろう。「臺山」の号は、以前から使用していたが、これを機に正式に藩庁へ届けたということであろう。間もなく臺山は麻布長坂に隠栖した。臺山は「麻布」を、しばしば「麻阜」と記す。

しかし麻布に移った臺山は悠々として清隠三味の余生を送るわけにはいかなかった。臺山を襲ったのは、悴周蔵の死による家の存続問題であった。封建的家臣団に属するものとして、継嗣の断絶は、最大の不忠不孝に当る。臺山は躍起になった。隠居した年の8月、悴周蔵は病死した。早速、杉浦榎蔵養方の叔父弘を、周蔵の後嗣とした。しかし弘も、翌年5月病死した。そこで三州三宅侯の臣鷹見忠治郎を弘の養子とした。臺山は忠治郎の曾祖父ということになる。忠治郎によって廣瀬家は断絶をまぬがれた。しかし臺山の血脈は廣瀬家から絶えた。文化元（1804）年から同8年まで、山水画の創作や文人との交遊の中に、その孤独を没入させた。

臺山の画風が、明清画のそれを忠実に範としたのは、上級武士としての思想に基づくものであったといえよう。その著『雅俗涇渭辨下』に

「雅俗といふ事も、今世其实義を誤り心得ることありて、其弊少からず。詩人歌人書画家茶客俳諧者の類、多く其毒をなすによりて、遂に君子高貴人に及べり。まづ其詩人の雅とせる者を見るに、世に異なる態を好み奇怪放逸の行状を為し、世に用ひらるる事をうるさく思ふ振になし、喫茶飲酒を縦にし、世事にうときを高しと称し、日夜哦吟に耽る類を雅なりとし、これに反するものを俗とするなり」。

と言っている。そして、いたずらに儒教風の教養を軽視する輩は、わが国の文化的伝統を無視した非現実論者であるとしている。彼の描いた山水画をみると、『八種画譜』や『芥子園画伝』の方法論を忠実に受け継ぎ、緻密な樹法や、点苔を繰り返すことによって、士大夫としての気品

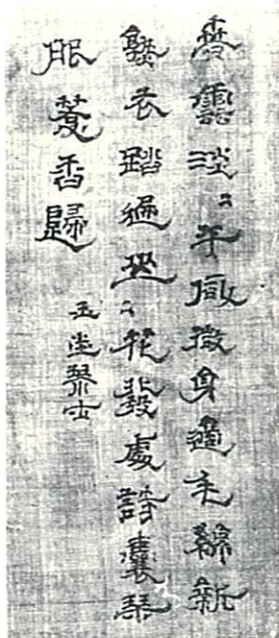
と格調を保っている。このような表現は、彼の上級武士としての教養に根ざすものといってよい。しかしそれだけであろうか。本来、生れついた包容性のある柔和な性格と、孤独な運命への諦観が、ひたむきな山水画の表現となっているのではないであろうか。換言すれば、幼にして母を失い、老にして子を失った人生の寂しさを、山水画に没入することによって昇華させたものが、臺山の絵であると思う。それは、人生への不満や漂泊の憂いを、激しい筆に託したり、客気と術才で作品を物す、「放蕩無頼の芸」とは無縁のものであった。

文化8（1811）年、還暦を迎えた臺山は、故郷の津山へ帰ることを心に決めた。津山には、大目付の役職を帯びる上原彦蔵が、臺山の唯一人の肉親として健在である。津山藩『国元日記』の同年8月13日の項に、「一、上原彦蔵義、実兄廣瀬忠治郎曾祖父臺山并同人妻、兼々病身ニ付、此表江罷越、養生致度旨、依之右逗留中引受、致同居度旨伺書、同役以大目付差出、御聞届」とある。津山での落居先は、異母弟の上原彦蔵の所であった。この年も大作を物している。「辛未上巳後一日写麻阜欄高臺山」の款記をもつ「溪亭邀友図」は、全紙の大作で彼の代表作の一つと言えようが、この図には雪々嶺増山雪斎の賛文がある。

臺山が津山へ帰るということになると、江戸の文人のなかでも交遊浅からぬ者たちが、送別の筵を持った。今、その筵の盛大であったことを思い起す資料が、臺山の寄留した上原彦蔵の子孫の家に伝えられている。「縮柳」の額字を贈った増山雪斎を初め、谷文晁、大窪詩佛、僧雲室、市川米庵などが、その得意とする書画を物して贈った。片桐蘭石は、東坡巾と唐服を着し、如意を持った臺山の肖像を描き、後に翁を偲ぶ便とした。「辛未秋晚写、蘭石桐隠」の款識がある。増山雪斎、勢州長島藩主、巖々翁の別号あり、人物山水花鳥画とともに詩文を能くす。大窪詩佛、詩文に長じ、墨竹を能くす。市川米庵・谷文晁については略す。片桐蘭石、名は隠、人物を描いて巧なり。僧雲室、江戸西久保光明寺に住す。絵を文晁に学ぶ。詩社を結んで「小不朽吟社」と言う。臺山はこの詩社の盟主であった。

「世歳交遊郷土同、別離雖暫恨無窮、龍鐘今日相憐否、千里行程六十翁」。江戸を去るに当って、臺山は詩を残した。郷里を同じうする友人については不詳、龍鐘は金龍山浅草寺の鐘声。人生の夕暮において、永らく親しんだ江戸

臺山愛用と伝えられる琴囊に記された浦上玉堂の詩



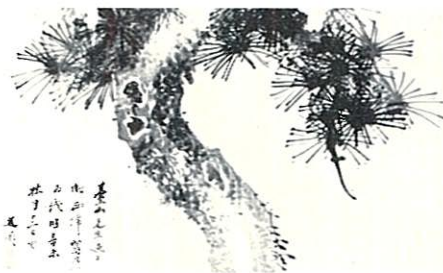
を離れ、遠路を津山へ向う人の寂寞とした思いと気概とを窺うに足る詩である。臺山夫妻は、江戸を9月20日に立、翌月22日、津山の上原家へ到着した。『国元日記』の10月22日の條に、「上原彦藏義、実兄廣瀬臺山、妻召連、江戸去月廿日出立、豆州熱海入湯、其外

所々手間取、今日同人方江着いたし候旨、以大目付相届之」とある。普通江戸から津山への行程は20日前後である。悠々とした道中であったといえよう。上原家に到着いて、弟彦藏のために代表作「山静日長図」を描いた。12月3日、臺山夫妻は、上原家から新田村に移った。新田村は今日の津山市安岡町。大坂屋勘助が何かと面倒を見たという。臺山が上原家から新田村に移転した理由は、弟の彦藏の病気のためであっただろう。「大目付上原彦藏当病不参」の記事が、『国元日記』に散見する。10月23日、11月1日、11月18日、12月3日、12月28日というふうには、翌文化9年4月25日、同じく日記に、「一、上原彦藏義持病不相勝候付、引籠、致保養度候段、同役以大目付相届之」とある。9月8日までであった。しかも、この間、彦藏はついに隠居した。5月28日の勤書に、「脾胃虚相煩、物覚疎相成、御役難相勤ニ付、御免願書差出、無余義趣ニ付、願之通御許容被成候」、同6月15日「致隠居度旨願書差出、無余義趣ニ付、願之通被成御許容候、在役中格別深切相勤候付、為隠居料五人扶持被下之候」とある。嗣子民藏への気兼ねもあったことであろう。

臺山の健康もすぐれなかった。文化9年4月3日には、作北の真賀温泉に保養にいっている。理由は「疝積ニ而致難儀」とある。明けて文化10年にも、再度真賀温泉に入湯した。5月16日から6月9日に及ぶ長逗留である。しかし

画の製作は、この間でも続けられている。年記のある作品で現存するものだけでも10点。「癸酉仲秋筆、臺山居士」の款のある「秋景山水図」は、絶筆ともいえるものであるが、さすがに筆の衰えを見せる。事実、臺山自身、こうした老衰を自覚していた。文化9年に成った「西園雑集図」の款識に「余既過耳順目眇」とあり、翌年、死没の年に成った「孟母断機図」には、「時顔齡、踰六望七、目霧手顛、尤不能工、強塞貞尔」とある。

持病の疝積は、月々悪化していったようである。『国元日記』の文化10年8月23日に、「廣瀬臺山、疝積致難儀候付、為療用、播州津名村与右衛門与申者方江暫逗留差遣」とある。しかし病状は回復しなかった。10月13日、臺山は死去した。同じく同日の日記に、「一、上原淳平(彦藏の嫡子民藏)義引受罷在候廣瀬臺山、病氣之処養生不相叶、致死去候旨、以大目付相届之」とある。江戸の廣瀬忠治郎のもとへは、29日にその知らせが届いた。時に臺山63歳。津山へ帰って足かけ3年目に当る。実弟上原彦藏は、翌年5月、薨髪して簡貴斎と号した。



谷文晁筆 臺山送別画 文化8(1811)

特別展 岡山県の歴史と文化

全国高校総体協賛のため、7月22日から8月21日まで、廣瀬臺山展と同時に上記の特別展を開催します。これは次のような内容で、本県の歴史と文化を概観し、遠來のかたがたに紹介しようとするものです。

- <第1室> 岡山の原始時代(瀬戸内のあけぼの、縄文時代、弥生時代、古墳時代)
- <第2室> 岡山の古代・中世(律令制と農民、吉備氏と和気氏、莊園と武士、備前焼と備前刀、榮西と法然、中世の信仰、戦国の世)
- <第3室> 岡山の近世と民俗資料(大名と領国、備作の洋学、美術、蘭と花筵)
- <第4室> 廣瀬臺山とその文人画

テーマ展「廣瀬臺山とその文人画」出品目録

会期 昭和52年7月22日～8月21日

絹本墨画	江村烟雨図	1幅	寛政7(1795)	廣瀬臺山筆	津山市	上原環一郎氏蔵
紺紙金泥	幽巖茅屋図	〃	〃 8(1796)	〃		
絹本著色	五柳先生図	〃		〃		
〃	武陵桃源図	〃		〃		
紙本著色	青壁茅亭図	〃		〃	館	蔵
紙本墨画	指頭山水図	〃		稲垣茂松賛	津山市	上原環一郎氏蔵
絹本淡彩	雪中天台図	〃		〃		〃
〃	秋山烟霽図	〃	享和元(1801)	〃		〃
紙本著色	松竹書屋図	〃	享和3(1803)	〃		〃
〃	醉翁亭図	〃	文化4(1807)	〃	中央町	興善寺蔵
〃	山静日長図	〃	文化8(1811)	〃	津山市	上原環一郎氏蔵
〃	溪山無盡図	〃	〃	山田方谷別賛		〃
	唐詩	〃		〃	津山市	津山郷土館蔵
	七言絶句	〃	文化8(1811)	〃		
	臺山先生送別書画	〃	〃	増山雪齋、僧雲室、大窪詩仏、谷文晁、市川米庵、他	津山市	上原環一郎氏蔵
絹本墨画	画石三面法図	〃	安永4(1775)	福原五岳筆		〃
紙本墨画	墨梅図	〃		〃		〃
絹本著色	唐人人物図	〃	文化4(1807)	片桐蘭石筆		〃
〃	富嶽小径図	〃		飯塚竹齋筆賛		〃
紙本著色	藍田叔秋景山水図	模本 1幅		廣瀬臺山写		〃
	画帖	1帖		廣瀬臺山稿		〃
	画帖	1幀	寛政4(1792)	〃		
	画稿	1括		〃	津山市	上原環一郎氏蔵
麻布淡彩	伝臺山琴囊	双幅	寛政12(1800)	谷文晁、浦上玉堂 他		
	臺山著用巾	1帽			津山市	上原環一郎氏蔵
	臺山使用唐机	1机				〃

予告 本年度特別展

岡山の人と書

10.4～11.3 (通常料金)

法然、栄西、元光、宇喜多直家、池田光政、三浦明次、熊沢蕃山、頼山陽、良寛、寂巖、平賀元義、山田方谷など、岡山由縁の人の書を展示する。

岡山県立博物館だより No. 10

発行日 昭和52年7月22日

発行者 岡山県立博物館

館長 安藤和昌

岡山市後楽園1-5

TEL(岡山)72-1148